

象徴・構造・感覚 文化人類学と〈女性〉

藤崎康彦

1

人口問題のある国際会議で、たしか産児制限についての話がかみ合わなかったという話をきいたことがある。それぞれの社会で「人間」の概念がちがうからである。「女性」についても同じような問題が生ずるかも知れない。文化人類学はそういうことに関する知識を沢山持っているのだから、私は余りにして調べたことはない。

文化人類学と女性との係わり合いについてはこの他にも色々な局面から考えてゆくことができる。自然科学的な概念と、それぞれの社会で「女性として通用すること」とはどう関係するか、「女性らしさ」について各文化はどう考えているか、それは普遍的なものか、どのように形成されるか等々について興味を抱いた研究者もいる。社会の中の男女の役割分割等の、性分割の違いについての、あるいはもっと広く、政治・経済・社会構造上の、更には象徴

的宇宙観の中での女性の位置付けについての情報は、民族誌に沢山見出すことができる。更にその構造的位置における主体の眼からその生活を生き生きと描き出すことを一つの文化の記述の方法とする、ライフストーリー的記述の試みもある。視点を変えて、女性人類学者の仕事について考えてみることもテーマとして可能である。

ただ、以上は、最後のテーマは少し別にして、総て男女の対になった概念に関係していて、特に女性のみに係っているわけではない。それらのテーマの脈絡で女性について考えることは同等の重みで男性についても考えることにはならずである。特に女性についてとりたてて考えたことはないという理由はそれである。

人類学は Study of Man と称しながら、そのマンの概念自体からして、大人の男中心の発想であり、人類学もその偏りの影響をうけているという指摘の意義と、女性と子供についての知識の増大に果した女性人類学者の役割の意義

は勿論認めるが、それは人類学がより未熟だったからに過ぎないと思う。思い込みによる誤ったあるいは偏った問題設定であったとか擬似問題の問題設定であったということ自体、人類学的知識の増大によって気付かれるようになってきた面が多い。

2

しかし、社会の中の女性のあり方について、気になることはやはりある。象徴論、あるいは文化記号論の立場からの女性についての論考が増えているように見える。それに関連して、私は自分の興味関心から、気になることを書いてみたい。

文化によって、男女にまつわる諸現象は多様に異なっているようにも、共通して言えることは現象の分割の軸として男女の軸を用いていることである。つまりとにかく人間の分割の仕方として男—女の対概念を使っているのである。

人類としての我々は自らとその周囲の現象を理解する方法として、一組の対立的な二項の概念に物事を分けることを行う。例えば、光と闇、天と地、昼と夜、カミと人、男と女、人と動物、等々である。しかし二項対立をいくつ作り出してそれらをバラバラにしておいては世界を統一的に理解することはできない。その二項対立同志を重ね合わ

せることが一つの解決策になる。表現を換えるなら、隠喻ないし換喻のイメージにより二項同志を象徴的・意味論的に結びつけてゆくのである。

例えばアラブのある社会では、男—女の軸に、外と内、公と私、光と闇、乾と湿、東と西、天と地、等々の対立軸が重なり、一つの堅固な象徴論的宇宙観コスモロジーを構成している。彼らはその宇宙観の中で自らの位置を定めて暮しているのである。このような場合、外からみて、女性が家に閉じ込められているとか社会的に活動することを妨げられているとか指摘できるかも知れない。しかし女性が家に閉じ込められているのと同じ意味で、二元的構造から必然的に男性は家から排除されていて、一つの社会的強制として、少くとも日中は家に留まることは許されないことも知らなくては片手落になる。男は常に外に出ていて、鋭いまなざしで他の男達を見据え、圧倒し、自らの名譽と威厳を守らなければならぬ。公的な世界、即ち男のみの世界で他の男達に相対していなければならず、家に閉じ籠ってれば弱虫か変人扱いされてしまう。どちらにしても名譽を失うのである。これはこれで大変なことで、邪眼の恐怖にとりつかれても致し方ないような気がする。

このように、二項対立によって一つの統一的な世界観、宇宙観が組み立てられ、人がそこで生きる時、個人の感情や思惑を超えた「構造」によって自らのあり方が規定され、

感情すらもそれによって形作られる面があるのである。

3

社会構造についても同様なことがいえる。いくらかのアフリカの社会は、父系の単系出自集団と夫方居住制を社会の基礎に持っている。妻は夫の親族関係者のみで構成された居住地に全くの異質な存在として婚入して来る。その社会に妖術の信仰がある場合、婚入して来た女性は異質な存在、潜在的な敵として、しばしば妖術使いの嫌疑をかけられる。我々―彼等、親族―姻族、味方―敵という分類が重なり合えば当然といえる。更にこういう社会は一夫多妻制であることが多いが、その時、妻同志の反目が夫に対する不満として向けられるものだと人々が考えているなら、ますます妻が妖術使いの疑いを受けやすくなる。

これは特殊な例でなく、一般的に女性が何らかの意味で構造的に不利な位置を与えられることは多いようだ。男―女の軸に、文化―自然、優―劣、正―邪、浄―不浄、等々の対立軸を重ねる時、女は―(マイナス)の価値に等置されることが多い。そうなれば女性の構造的劣位は固定的なものになってしまし、女性の劣位を説明するエピソードを神話に組み込んでおけば、仕掛けは完全なものとなる。

世界中で、女性が特別の呪力、靈力を持つとする例は多

い。その力は「妹の力」であることもあるが、有害な力としても表象される。ヨーロッパでも「魔女」であって、特に女性が妖術使いとされたゆえんである。しばしばそれは女性の本質のせいにされ「女ってそういうものだ」式の説明がなされることがあるが、実は今述べたように構造的なものなのである。男が意識して作りあげたというものでもなく、やはり男もその構造の中に等しく組み込まれている点では同質なのである。

4

私が気になることは、その先である。私は文化研究の一つの戦略として、妖術、呪術、シャーマニズムや、民族医学、文化精神医学特にその文化拘束症候群等に関心を抱いている。文化は現象を説明する力を持つが、最も説明される必要のあることはどの社会においても、不幸や災難であり、その典型が病気である。その病気等については、人類に普遍的なものをそれぞれの文化ごとに固有の説明を治療を行っているのだろうか。それとも場合によっては、文化そのものが病気をひきおこすのであろうか。このような問題意識から、例えば今の女性の構造的な位置付けについて考えると、次のような疑問が生ずる。

まず、女性は(もう一度断っておくが、あくまで今迄の

論述のゆきがかかり上女性について議論しているものであり、男性は、と言ってもここでは同質であることは注意して欲しい)構造に埋もれてしまつて劣位であることに何も感じないのだろうか。これにつき、例えばアフリカで、結婚式の際、儀礼として、しかし実際に強く、妻を夫がムチ打つ社会があることが思い浮かぶ。妻は敵の一員だから、とも、劣位者にその地位を思い知らせるため、とも考えられる。確かにこの習慣に関連してだと信ずるが、ムチ打たれる女性にはっきりと性的な陶醉の表情の浮ぶのを認めた、という報告にどこかで触れた記憶がある。

これに対して、女性は、公的には、あからさまには、表現できない苦しみを無意識裡に苦しんでいるのだろうか。例えばアフリカで、呪医等のその土地に固有な治療者のもとに通う患者(その多くは女性)が訴える症状には、身体化された抑うつ状態と言ふべきものが多いという指摘を聞いたことがある。

5

もう一つ気になることがある。以上は二項対立を固定させて、明確な宇宙観を作る社会を想定して考えてみたものである。これに対して、二項対立はあつてもそれを固定しない社会があつた場合、その社会の諸現象はどのようなものになるか、例えば女性の苦しみ等はどのような形をとるものかが気になってくる。

そのような可能性について考えるようになったのは河合隼雄氏の日本文化についての「中空構造論」(中空構造日本の深層)中央公論社、一九八二年)に触れたことが原因の一つである。彼の話の要点を、例えば古事記に基づいて説明するなら次の例に典型的にみられる。

重要な登場人物が関連のある三者(一例として、アマテラス、ツクヨミ、スサノオ)であつて、かつそのうちの一人が、登場だけはするが以後一切その行動が語られることがないこと、残り二者の相互に関連した行動によって神話的エピソードは展開されるが、それはどちらか一方に優劣、正一邪、等の位置あるいは役割を固定的に割り当てるようなものではなく、相互に入れ替わるものであること、それはあたかもある一人(ツクヨミ)を中心として、対立する他の二人(アマテラス、スサノオ)が絶妙のバランスをとっているかの如くに見えること、が特徴的に指摘できる。このように、真中に無為の中心を置き、両側の二者のいずれか一方を他に抜き出すことは避けられ、ある局面で優位にあつた者が次の場面では劣位になつたりする例は古事記にはいくつかみられるという。三者構造の真中が中空になつていくようなものだから、これを中空構造と河合氏は名付けたのである。

この構造は、私の眼にはヤジロベエ構造とでも名付けた方が良いでしょう。今迄の脈絡で表現し直すならば、二項対立を重ね合わせてもそれを固定化しない思想といえるだろう。棒の両端に豆をつけたものを二本重ねる。それぞれの軸の真中を垂直に別な軸でつないでみる。そうすれば、二本の棒は関連付けられてはいるが固定されずに、垂直軸を中心としてクルクル動くことができる。そのようなイメージで理解すると、分り易い。

しかしそうすると、日本には少くとも男女の軸を中心とした明確な宇宙観がないことにでもなるのだろうか。確かに、一般的にはっきりとした優者、劣者を作らない感覚については幾多の日本文化論の中でも指摘されているが、深い民俗的思考の世界ではどうなのであるか。

また、これと同じ河合氏の、日本は「母性原理」の文化だとする指摘（『母性社会日本の病理』中央公論社、一九七六年）を重ね合わせると、日本文化の構造について、分析心理学的な観点からの一つの読みとりが可能になる。

それはともかく、このような社会では、女性（同様に男性は）どのように感じるものであろうか。固定的に不利な立場を押し付けることはなく、一つの局面で不利益を受けても他の局面で補償されてそれなりに満足するものがあるのか。それとも場面によって変る自分の位置付けに却って戸惑って、深い宇宙論的なアイデンティティが確立でき

ずに苦しむことになるのだろうか。あるいはこのような問題の立て方自体をもっと異質な理解力によって変えなければならぬのだろうか。

この辺からもう問題を定式化してまとまりのある思考をすることが難しくなる。苦しみと言ってもその現われと認知は、様々なレベルや様相で可能になる。それらを整理するには、例えば心・身の病を文化の脈絡の中で捉え直す作業が伴わなければならないと思う。しかしその作業はようやく人類学の中でも始まったばかりである。したがって今のところ、「気にかかる」けれども意識と思考の周辺にとどまっただけで、チクチクと刺激し続ける刺のようなものとして、私はそれらを持ち続けるしかない。色々と関連し面白いテーマは広がるが、キチンとした証拠調べもしないで推論を重ねることはこれでやめ、いずれそれぞれについてあため続けた結果は報告したいと思う。

（ふじさき やすひこ・専任・文化人類学）